原告団

遺族・CO裁判、災害責任追求、特集号

第9号

投げ飛ばすビールビン

誰に向って爆発する怒りか

CO患者山田勝さんの苦しみ

よろこび…

山田さなえさんが、夫の勝さんを市内のN外科で発見したとき、彼は同病院の控室の畳のうえにただころがされていた。

三川鉱で大爆発が起きてから、もう十時間ばかりもたった夜なかの午前一時過ぎのことだった。

勝さんは、すっかり意識をうしなっていた。その時刻、彼が掘進工として坑内で働いていたことをさなえさんも知っていたし、さらに爆発後どんどん時間ばかりが経過してゆくものだから、「ひょっとすると、夫はもう死んでいるのでは……」との不安をおぼえずにはすまなかった。その勝さんが生きていてくれたのだから、たとえ意識こそうしなっていたにもせよ妻のさなえさんのうれしさは限りがなかった。

「人さまの知らせでN外科にかけつけてみますと、主人がちゃんと生きていたでしょう。それに、そのときはまだCO中毒症というものがこんなに恐ろしいものだということも知ってはいませんでしたから、主人の姿を発見したときのうれしさは、今も忘れられんですね」――こう語るとき、さなえさんの口もとはほころび、その細面は輝くのだった。

思い出……

ついこのころのこと、万田作業所でノリミス編みの仕事をしている勝さんをたずねた。

彼は、昨年七級という傷害認定を受けたばかりの身。作業も、まだ半日作業である。

勝さんは仕事の手を休めていたが、「山田さん、ああたのことを聞いたとき、奥さんが、ああたを発見したうれしさを、目を輝かしながら話しなはったそうですが、よほどほれあったうえで結ばれたのではなかですか」と聞いたところ、いろ浅黒く、濃いヒゲをはやした勝さんもまた、思わず白い歯を見せ、頭をかきかき言った。

「実は、あれは私のところに家出して嫁にきたんですたい」

「でしょうね。何かがありそうに思っていました。で……」

「もともとあれには、親の許したいいなずけがいたのでした。それも、自分が向こうの家の長男に嫁にゆき、その長男の妹が自分の兄貴の嫁にやってくる……。つまるとですよ」――荒尾市緑ケ丘社宅楓町五十四棟の社宅の一隅の家で、母親のヒサエさんは息子の勝さんのことをこう述懐する。

「大爆発までは、息子はとても女房思い、子ども思い、そしてまたとても親孝行者でした。親父（一さん。昭和二十六年けい肺のため死亡）がまだ生きていたころのことでした。息子はまだ中学生じゃったですけど、アルバイトにいっていたところの親方から、ガザガザのリンゴをもらったというので、ほかの人たちはその場ですぐ食ってしまうのに、息子だけはしんぼうして、けい肺のため体の弱かった親父に食わしてやりたいばっかりに、ひとり持ち帰ってきてくれたこともございます。

ところが爆発からこっち、何で腹を立てるかわからんでしょう。はじめのころは、『親に向かって何ばいうか』と、こっちも負けずに腹を立てては、猛烈にケンカしていましたばってん、今ではこれがCO中毒症というもんだ、とわりきって、うち合わんことにきめておりますたい。ハイ」

ヒサエさんに聞けば、ある年の十二月の三十一日の晩のこと、きつい暮らしのなかながら、せめてものささやかな御料理とビールを食卓にならべていた。もちろん、落ちついたところで、あのNHKテレビの〝紅白歌合戦〟の番組でも、家族がうちそろって楽しみながら、やがてくる新年を迎えようとの願いからだったことは述べるまでもなかろう。

ところがである、何が気に入らなかったのか、本人自身がわからないのだから、家族のみんながわかるはずがない。食卓の前に座るや否や、勝さんはいきなり食卓をわしづかみにして、思いっきりひっくり返し、そのうえ手当りしだいに品物を投げ散らかしたのだった。

これはまた別のときの話で、勝さんが、一本、二本、三本、どビールビンを家のそとに向けて投げとばしていたとき、近所に住む三池労組員の一人＝Oさんが通りかかったとか。

Oさんは飛んでくるビールビンにびっくり仰天。でも、すぐ事実を知って「ほオ、ビールビンの飛んできよる。こらア、よいところへ通り合わせたバイ」、と笑ったというが、こんなことは決してめずらしいことではない。

「山田さん、あとで、『俺は悪いことをした』と、やっぱりくやまれるでしょうね」と聞くのに、勝さんは首をかしげながらいうのだった。

「いや、くやむ前に、自分が何をやったかすぐ忘れてしまうとですたい。だからそういわれても、ほんとに私にはわからんとです」

もの忘れ…

勝さんの症状の特徴の一つは、恐しいばかりのもの忘れ。

職場仲間が言う――「この人はああた、事務所にこの人あての電話がかかってくると、話をすませて受話器をおいて、ここまで帰ってくるうちに、もうきれいに忘れてくるくらいで、だれでもまねができんですよ」

それは、ほんとうの話だった。

というのは、彼は大小にかかわらず、人と話したこと、自分がしなければならないことを、小さなノートか、タバコの袋にそのときそのとき、必ず書きとどめてゆくことにしている。でも、書きとめたこと、あるいは書きとめた小ノートやタバコの袋をすぐどこかに置き忘れるのが常で、どんなに書きとめてもスッカリ帳消しになってしまうことが少くないからあわれだ。

彼は、二～三年前ころは中央委員もかって出たし、今また地域分会の役員としてやる気いっぱい。「自分としては、社会復帰訓練のつもりでもあります」、との勝さんの言葉には切実な願いがこめられているのである。でも十年以上も住みついた社宅なのに、たった四人の班長の家をたずね当てることができず、菜もどりがほとんどだとは。

勝さんが三十八才。サナエさんが三十六才。それに子宝が二人。上の達夫君が十四才で中学二年。下の順子ちゃんが十一才で、小学五年。母親のヒサエさんが六十六才。父親勝さんの昔の人間を思わせて、二人の子どもたちが学校そのほかのいろんな機関からもらった表彰状が、ズラリふすまのうえの壁にぶらさがっている。

この夫の勝さんを守るために、妻のサナエさんは、これまで常に命を守る闘いの先頭に立ってきた。今後も、勝さんの苦しみが続く限り、この一家が歩く道は闘いの道でしかないのだが、この山田勝さんの労災補償を打ち切ると同時に、政府の機関がつきつけてきた〝裁決書〟はいっている。

「家庭内での葛藤がみられるようで、精神的に不安定な状態にある。家庭内の事情が好転すれば改善されるものと思われる」

何をいうか。

前と今と…

「ハイハイ、こげんよか嫁ゴは二人とはおりまっせん。この嫁なしには、息子はとても生きてはいけまっせんよ。その嫁を、これは踏んだりけったりするでしょう。CO中毒症がそうさせるとでしょうばってん、ほんとに情けなくなってしまうことが少くないからあわれだ。

彼は、二～三年前ころは中央委員もかって出たし、今また地域分会の役員としてやる気いっぱい。「自分としては、社会復帰訓練のつもりでもあります」、との勝さんの言葉には切実な願いがこめられているのである。でも十年以上も住みついた社宅なのに、たった四人の班長の家をたずね当てることができず、菜もどりがほとんどだとは。

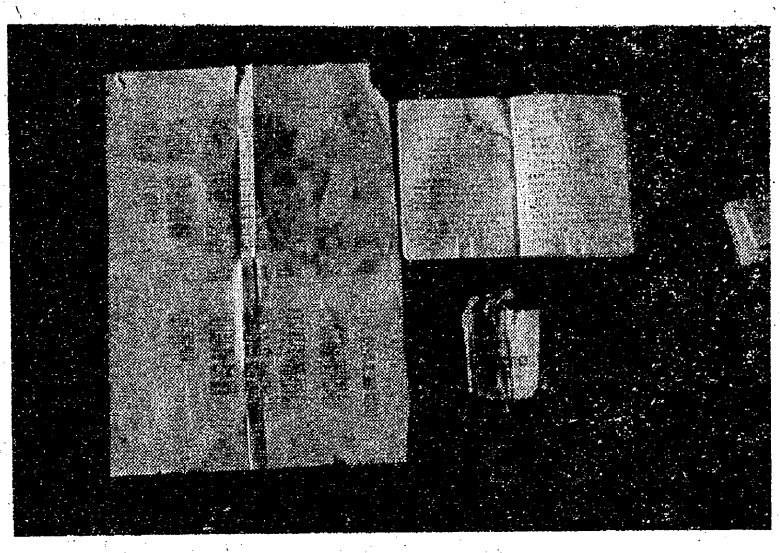
勝さんが三十八才。サナエさんが三十六才。それに子宝が二人。上の達夫君が十四才で中学二年。下の順子ちゃんが十一才で、小学五年。母親のヒサエさんが六十六才。父親勝さんの昔の人間を思わせて、二人の子どもたちが学校そのほかのいろんな機関からもらった表彰状が、ズラリふすまのうえの壁にぶらさがっている。

この夫の勝さんを守るために、妻のサナエさんは、これまで常に命を守る闘いの先頭に立ってきた。今後も、勝さんの苦しみが続く限り、この一家が歩く道は闘いの道でしかないのだが、この山田勝さんの労災補償を打ち切ると同時に、政府の機関がつきつけてきた〝裁決書〟はいっている。

「家庭内での葛藤がみられるようで、精神的に不安定な状態にある。家庭内の事情が好転すれば改善されるものと思われる」

何をいうか。

自宅にくつろぎながら、職場の仲間たちと語り合つたりする山田さん（向つて右端の人）



地域分会員の住居を示す地図や、ノートにタバコの袋。山田さんの生活必需品。